

教会ってどんなところ？

神

と出會える

あるべき姿をみいだせます。

それはまるで、生き別れた本当の父親に出会う瞬間です。

神はあなたを世界でたった一人の特別なオンリーワンの存在として愛しています。富・能力・肩書・行い……そのようなものに一切関係なく、あなたをありのままに受け入れてくださいます。なぜなら神は天にいるあなたの父、造り主だからです。ここがあなたの居場所です。

救

いにあずかる

あたたかないのちが

回復します

それはまるで、家出した子供が父のもとに帰り抱きしめられる感動です。

神から離れ、思うがままに生きているのが罪です。人はそれを自由とっていますが、心のなかにはねたみ、憎しみ、疑い、好色、嘘、貪欲、高ぶり…などに満たされ人知れず心疲れ、病み、行き詰まっています。救いとは罪を認め、神に立ち返るときに与えられる、許しです。

満

ちあふれる

確かなぬくもりの中を

歩き続けます

それはまるで、温かく大きな手に握られている歩みです。

日曜日に教会に来て礼拝する生活は、あなたの魂と心を生き生きとさせます。それはまるで泉に植わる木のように。讃美歌を歌い、祈り、聖書のメッセージに耳を傾ける時、神の働きかけを受けて心は平安と喜びに満ち溢れるからです。新しく生き生きと輝く秘訣です。

定期集会

どなたでもおいで下さい

(日) 礼拝と学び 10:30~12:10	(水) 聖書の学びと祈祷会 19:30~
教会学校 13:30~14:30	
夕 拝 19:30~	(金) 聖書の学びと祈祷会 10:00~

子母口キリスト教会

チャペル通信

96号

2015年 讃美歌特集(その3)

讃美歌と童謡②

わたしはあなたがたを捨てて孤児とはしません。わたしはあなたがたのところに戻ってくるのです。 ヨハネ14章18節

童謡「赤とんぼ」のクリスチャン作曲家・作詞家それぞれに

あった「父」(創造主)への思い、郷愁が名曲をうみだしました。

今年は川崎では満開の桜のもとで、主イエス・キリストの復活を祝うイースターがありました。長く寒い冬の風にも耐えて一気に咲く桜には、希望と復興の願いが込められています。この通信をご覧いただく頃は桜前線は北上して東北地方・北海道に達しているでしょう。

イースターが過ぎますと、教会ではもう一つの大事な祭事のペンテコステがあります。クリスマスがイエス・キリストの誕生なら、ペンテコステは「教会」の誕生を祝う日です。今年は5月24日の日曜日です。復活されたイエス様が「聖霊」として、わたしたちに現れたのです。イエス様は私たちを決して孤児(みなしご)にはしないと約束して下さいました。地上での孤児にはだれもがなる可能性があります。

多くの童謡を作った三木露風と山田耕筰にはともに幼い時に父と離れる体験をしていました。その幼い時の体験が、父とつながる「救い」の体験として信仰を告白し、洗礼をうけて、クリスチャンとして生きていったのでした。逆に野口雨情や村岡花子のように幼いこどもをなくした父の「悲しみ」は、私をも愛して下さいる創造主なる神さまの愛によって癒されるのではないのでしょうか。死は決して終わりではないのです。今回も讃美歌と童謡をめぐるお話をお届けしました。

〒213-0023 川崎市高津区子母口776

発行

日本同盟

子母口キリスト教会

編集

基督教団

e-mail shibokuchi@church.jp

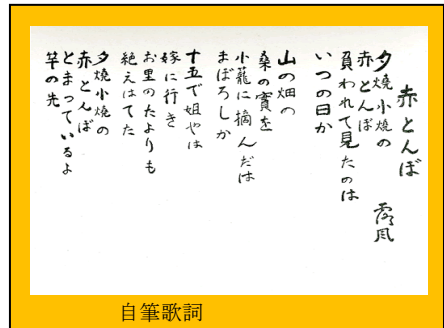
牧師 小岩井 信 http://shibokuchi.church.jp/

電話 044-766-0181 FAX 044-766-2157



旅人としての人生を送った2人のクリスチャンには、

赤とんぼに寄せる思いは一致していたといえます。



自筆歌詞



三木露風

三木露風は明治21年(1889年)に兵庫県たつの市で生まれましたが、5歳の時両親が離婚し祖父に引き取られています



山田耕作



関西学院時代の耕作

この詩は、彼が27歳から32歳まで教師をしていた**トラピスト修道院**の庭で**赤とんぼ**が竿の先に止まっているのを見て作ったのですが「赤とんぼ止まっているよ竿の先」の俳句は12歳の時の作品だそうで、後の随筆では、赤とんぼの「漂泊の身」を自分と重ねあわせています。止まっているのはここ修道院でのキリストにならって生きる自分の生きざま、として、天の父なる神に愛されつつ、聖く、静かな**平安(シャローム)**な生活を思っただと私には思えました。この止まっている竿は、修道院の十字架を想起させます。露風は**カトリック**のキリスト者として、バチカンから「**聖騎士**」の称号を受けています。

山田耕作はたくさんの童謡を作曲しています。東京**本郷**で1886年(明治19年に生まれました。**父建造は医者でキリスト教の伝道者**でした。ハンセン氏病の患者の救済に生涯をささげました。幼い時から英語で讃美歌を歌っていました。(95号で**本郷中央教会**を紹介しましたが、そういう環境にいたのが、後の音楽家山田耕作の原点であったのでしょう。**宣教師のエドワードガントレット**は本郷中央教会の聖歌隊の指導者でした。割く割く10歳の時に父召天、母は自立させるために**自営館**(現巣鴨教会)に預けました。**自営館**は孤児などに配達や印刷業に従事させながら、帝大や早稲田に学ばせる施設でした。そこで**13歳の時洗礼を受けています**。その年、姉のガントレット恒を頼って岡山の忠養学校にて学び、関西学院に入り、やがて東京音楽学校(現・芸術大学)に入学し作曲家として活躍しました。

山田耕作の童謡

赤とんぼ	三木露風
兎のダンス	野口雨情
小山の大将	西条八十
七夕	川路柳虹
砂山	北原白秋
待ちぼうけ	北原白秋
ペチカ	北原白秋
あわて床屋	北原白秋
この道	北原白秋
からたちの花	北原白秋

消えゆく幼い命の鎮魂詩としてシャボン玉と「主われを愛す」とのある共通点とは

シャボン玉飛んだ
屋根まで飛んだ
屋根まで飛んで
こわれて消えた

シャボン玉飛んだ
飛ばずに消えた
産まれてすぐに
こわれて消えた

風、風、吹くな
シャボン玉 飛ばそ

94号で紹介した、日本で最初の讃美歌の「**主われを愛す**」の英語原詩は1860年に出版されたアンナ・ワーナーの小説 Say and Seal の第2巻8章の中で、少女フェイスが見守る中、まさに天に召されんとする弟ジョニーの口から洩れ聞こえる歌であるそうです。

この曲と**シャボン玉**は曲がよく似ているところがあるといわれています。

野口雨情は1908年3月に長女のみどりを生後7日でなくしました。野口雨情はクリスチャンではありませんでしたが、早稲田時代には、三木露風など



交流がありました。作曲家中山晋平が主我を愛すを知っていたかどうかはさやかではありませんが旋律・リズムはよく似ています。



野口雨情

プレゼントします。

CD付きメッセージ
永遠のふるさと



福音歌手の森 祐理さんの唱歌ふるさとが聞けます。はがきで教会に申し込み下さい。郵送します。

5月31日(日) 13:30~

永遠のふるさと 讃美歌と唱歌がわかる

ビデオ鑑賞会

会堂2階にて

ナビゲーター 森 祐理さん
出演のビデオです

茶菓もあります。

94号で5月30日と間違えておりました。お詫び申し上げます。

